
古の血

紅瞳 愁桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

古の血

【Zコード】

N4469A

【作者名】

紅瞳 愁桜

【あらすじ】

ゼカミ力族の遺品である装飾品を探し旅をしている。ある街でゼカミ力族の血筋の少女を見つける。残念ながら既に親を失っているようだ。ゼカミ力族は絶滅寸前で、残っているのは俺だけである。しかし、同じゼカミ力族を見つけたことで希望が見えてきた。全ての遺品を見つけるまで俺らの旅は終わることはない。

序幕・廃墟

大都市の外れにある廃墟。

薄暗いこの廃墟には大都市からありとあらゆるものが捨てられている。

家具から人間まで不要と認められたモノがその量すら分からぬほど捨てられている。

捨てられたこの廃墟には当然、法はない。

強いものが勝ち弱いものが負ける、弱肉強食の土地である。

どんな手段を用いても最後に生き残った方が「正しい」のだ。

強さこそがこの廃墟では法である。

自分の持つてゐるすべての力を使っても生き残る」のことができるとは断言できない。

そんな世界だからこそ捨てられた人々は力強く生きているのだった。

捨てられた「」の山のわきを通り抜け、薄暗い裏通りへ入った。裏通りで耳を澄ますと微かに話し声のようなものが聞こえる。腰に差した刀に左手を添え、警戒しつつ声のする方へゆっくりと歩いていく。地面をおおつての「」につまずいたり、音を立てたりしないように慎重に。そのまま崩壊した高層ビルの横を曲がると人の姿を確認できた。ゆっくり物陰に隠れ、人影を観察する。

十メートルほど先によく肥えた中年の男と質素な服で身を包んだ十代ぐらいの若い女性が会話しているのが見えた。姿から若い女性は廃墟の者、男はどうやら若い女性を買おうとしているようだ。性は廃墟の者、男は大都市の者と言うのが分かった。

しかし、若い女性にはその気がないのか取引は難航を示しているようだ。次第に男の方がイライラとし始め、口調が激しくなってきた。そんな男をきつぱりと断り、移動しようとした若い女性の手首を男がつかんで無理矢理押さえ込んでその上に乗り、勝ち誇ったような胸くそ悪い声で笑い始めた。流石にこのままで若い女性が可哀想だ。そう思い、左手を刀に添えたまま一気に跳躍する。そして若い女性の服に手をかけた男のすぐ近くに着地し、着地と同時に残像が確認できるほどの速さで、空中で抜いた刀を横に薙いだ。骨を貫通する嫌な感触があつたが無視し、刀を振り抜いた。すると頭を失つた男は血の噴水を吹き上げながら、力無くその場に倒れ込んだ。血降りをし、刀を鞘に納めた。そして男の亡骸を蹴り飛ばすと、若い女性を助け起こした。

少々呆然とはしているが特に目立つケガはないようだ。だが、やはり廃墟の者だな。異常にやせ細つている。まあそれは良いとして先にアレを盗るか……。

思考を終了させて男の亡骸の方へ近付き、男のふところを探る。暫く探つてみると、手に硬いものが当たった。ゆっくり、慎重に取

り出すと、それは小さな銀色の指輪であった。複雑でビの言語にも属さない言葉が指輪中に刻まれている。

戦利品の指輪をゆっくりと自分の左人差し指にはめる。右人差し指にも同じような指輪をはめている。ようやくそろったか。

ふと、女性を見ると、何かに取り憑かれたようにじつとこちらを見つめている瞳と視線が交わった。眼があつても視線をそらすわけでもなく、じつとこちらを見つめている。

何となく視線をそらし辛いのでそのままにしていると、女性がそのままの口を開けた。

「何か食べ物持つてない？」

一瞬、何を言われたか分からなかつたが、意味をとらえ、ベルトに付けた小さい鞄を探る。しかし、あつたのは小さな飴玉一つだけ。これだけをあげても腹の足しにもならないだろう。ゆっくりと財布を取り出し、中身を確認した。

「はぐれるなよ」

折角警告しても全く聞く耳持たずのようだ。きょりきょりして今にも道に迷いそうである。買ってあげた薄い青色のワンピースを風になびかせながらスキップまでしてゐる。服は普通なのにもかかわらず、あまりに拳動不審なので周囲から視線を集めまくっている。もつとも、整つた顔立ちであることも理由であるとは思つが……。

あまりに危なげなので女性の手首をつかみ目的の飲食店まで引っ張つていく。スキップは止めてくれたが、歌を口ずさみ始めた。思わずため息をつきながら、飲食店のドアを開けた。

「ところで、その指輪なんなの？」

口にスパゲッティを含んだままモゴモゴと女性が尋ねてきた。食べるか喋るかどちらかにしろよ、と心の中で思いつつ

「これは元々俺の種族のものなんだ。今はもう俺以外は殺されちまた種族だけだ。極東の島の種族の最後の忘れ形見つてコトだ」「なるほどねー」

そう言いながら今度は餃子を口に運んでいる。何だか真面目に答えている自分が情けなくなってきた。とりあえず餃子を食べ終わつて満足したのか箸を置き、こちらに身を乗り出してきた。

「ねえねえそれって魔法みたいなものが使えるものでしょ。他にないの？」

思わず、飲んでいた珈琲を吹き出しそうになる。

「な、なんで知つているんだ！」

「だつて私、その字、さつき見えたもん」

笑いながら楽しそうに言つた。しかし、見えただけではこの指はの特徴が分かるはずがない。もしかすると……。

「……君、この字が読めるのか？」

「君、じゃない。私には秋楓って名前があるんだから」

「オーケー。じゃあ秋楓はこの字が読めるんだね？」

「……うん、読めるよ」

少々不服そうに認めた秋楓をまじまじと見つめる。ここに刻まれている文字は古代グンパジ文字と言って、俺らの種族、つまりゼカミ力族で大昔に使われていた文字だ。この文字を読める者はゼカミ力族でもかなり限られた者だけだったはずだ。それを読めるとすることは……。

「そうか、秋楓もゼカミ力族の者なのか」

「んー？ 何それ？」

「つまり俺と同じ民族つてコトだ」

「あーなるほどねー」

大して興味のなさそうな様子で返事をされたが、俺としてはかなり興味深いコトである。自分が最後の血だと思っていたが、生き残っていた血がいたワケである。しかも、聖血の方の血であるようだ。俺の体を巡っている賢血とは異なり、前線向きの血ではない。その代わり、生まれたときから古代グンパジ文字が読め、また操ることのできるまさに魔導師の様なタイプの血である。もつとも、攻撃向きの血なのか補助向き後であるかは分からぬが……。

「……なあおい、秋楓」

「何？」

首をちょっと傾けながら、いつの間にか食べていたパフェを机においた。

「俺と一緒に旅に出ないか？」

「……告白？」

「……そんなワケあるか……」

「別にいいけどー。代わりに小遣いちょうどいね」

軽く答えた秋楓の様子から察するに、両親はすでに他界しているようだ。大都市の者ならばこうも簡単に同行を同意しないだろう。

だが俺とこる以上命を危険にさらす可能性がある。ならば……。

「これ、腕にはめとけ」

そう言つて、さきほどと同じ鞄から、銀色のブレスレットを取り出し、秋楓の右腕にはめた。ブレスレットには同じく複雑な文字、つまりグンパジ文字が刻まれてる。

「何これ？　えーっと『火の道標』？」

「名前はよく知らないが、炎属性の腕輪だ」

「わあ、かわいい！　ありがとう」

「使い方は……」

「うん、大丈夫分かるから」

そう言いつつ秋楓は嬉しそうにブレスレットを眺めてる。これで少しは身を守れるだろ？

さて、と小さくつぶやき、次の注文をしようとしていた秋楓を無理矢理引つ張り、勘定を済まして店をあとにした。

ゼカミ力族の装飾品を取り戻すべく、次の町へ移動する準備を整えに、あちらこちらの市場で買い物を済ませた。買ったものはもちろん、すべてあの鞄の中に入れる。この鞄にも、実はグンパジ文字が記されている。そのために、容量が無制限なのだ。

次の町へは、やはり廃墟を通りいくのがもつとも近いようだ。急がば回れという諺が、ゼカミ力族の言葉にもあつたが、急ぐには近道を通りに限る。

そう思い、秋楓を連れ、再び廃墟へと入つていった。

歩き出して、早一時間。いい加減、同じような風景にも飽き、疲れてきた。ゴミで道が出来ているようなものなので、足場が不安定である。そのため、慎重に足場を選びつつ移動しなくてはならないので、よけいに体力を使つてしまつ。

陽気に歩いていた秋楓も、疲れのため無口になり、足取りも重くなっている。そろそろ、休憩すべきだな。そう思い、適当な場所を探そうとあたりを見渡す。

ふと、目の端が鈍く光るものを見た。

それが何かを頭が認識するよりも早く、体が動いた。力強くがれきの山を蹴り、秋楓を抱きかかえ飛び去る。

すると、空気を裂く音と共に、何かが先ほどまで俺らがいたところへと飛んでいくのが見えた。音からして銃弾であろう。すぐさま弾の飛んできた方向を見る。しかし、すでにそこに人の気配はなく、何も見つけることができない。

「まずいな。秋楓、予想どおり敵襲だ」

「えへ、休みたかったのにー」

「仕方ないだろ……。ちょっと待つてろ」

そういうて、不平をこぼす秋楓を残し、敵の行動の予測地点へと走つた。

がれきの山の陰に身を潜め、一いちらの同行をうかがおうとしていた青年の背後に舞い降り、腰に差していた刀を抜いて、青年ののど仮に刃先を当てた。確実に捕らえた、と思つたが瞬きをした隙に回避されていた。

地に伏せ銃口をこちらに向けている青年に追い打ちをかけようと、刃を返して振り下ろす。しかし、すでに構えていた敵の方が速く、銃弾の雨がこれでもかと言うほど、放たれた。何発かかすりつつも大半をはじき落とし、下から斬り上げる。今度こそしとめたと思うたが、苦し紛れに防御しようとした銃身にはじかれ、愛刀が遠くとばされてしまった。

とばされた刀を取りに行かせてもらえたほど敵さんは優しくないようだ。こちらの武器がないことを好機と見たのか、近距離なのにもかかわらず乱射してきた。距離がないため、当然ほとんどの弾を躰で受け止めてしまった。

体中に激痛が走るが、それにかまつてている暇はない。痛覚を一時的に遮断し、気を集中させる。

すると、両手の人差し指にはめた指輪の文字の部分が赤く光り出した。秋楓曰く『雷神の瞳』という指輪らしい。その名のとおり、雷属性の指輪ということだ。

赤く光る指輪に気がつき、あわてて青年がその場から離れようとする。しかし時すでに遅く、古代魔術の構築が完了した。それと同時に手を振り上げ青く光る指にさらに気を集中させる。

「解放」

静かに唱えると、指輪から青い光が放たれ、その光が全身を包み込むと同時に、躰中から青い電撃がほとばしり始めた。

青き稻妻を身にまとつたまま、青年の懷に潜り込み、鳩尾を掌で強く打つた。青年は電撃と衝撃により、断末魔をあげるまもなく吹き飛び、地に着いたときにはすでに炭化してしまっていた。

さてつと、小さくつぶやき、先ほどの場所へ戻つて行く。しかし、そこには秋楓の姿がない。不思議に思い、当たりを見渡すが姿どころが移動した痕跡すらない。

どうしたのだろう、と思い眼で引き続き探していると、割と近くで轟音と共に火柱が天高く上がっているのが見えた。どうやら、秋楓が『炎の道標』を発動したようだ。しかし、流石は魔導師。初めての発動であれほどの威力を誇るのなら、熟練した後ほどのくらいになるのか……。

何はともあれ秋楓が心配なので、煙がくすぶつっている方向へと駆け足で行つた。

崩れた家を飛び越え、着地したところは焼け野原になっていた。相当な炎が放出されたことが一目瞭然である。これでは骨どころか影すら残つてはいまい。文字通り蒸発してしまつてゐるだらうなあ……。などと考えながらゆつくりと当たりを見渡して

「あ、居た」

すぐさまがれきの山の陰で氣を失つてゐる秋楓の元に駆け寄る。どうやら『炎の道標』の爆風に飛ばされたようだ。顔色も良いので大丈夫だろう。

鞄からよく冷えた水を取り出し秋楓の顔にかけると、文字どおり勢いよく氷を覚ました。

「つ、冷たいっ！」

そう言つて騒いでいる秋楓に、これまた鞄からだしたタオルを渡しながら、周囲の状況を観察した。

いくら秋楓の力が強大だと言つても、所詮戦闘に置いては素人なので、敵を倒し損ねているかもしれないからである。

しかし、敵の気配は全くなく、感覚を澄ましても何も感じ取れなかつた。

どうやら『炎の道標』に完全に蒸発されてしまつたようだ。そう判断したところで落ち着いて秋楓を見る。

「よし、もう大丈夫だ」

そう言つて秋楓を抱き起こす。多少、混乱したままであるようだが、特に外傷はない。あの爆風に巻き込まれながら傷一つない。……全くどこまで強運なのだか……。

タオルを再び鞄に入れ、今度は離ればなれにならないように手を繋いだまま移動を再開した。

二人の旅はこれからも続く。

一族の遺品を求めて。

一族の思いを求めて。

当てはないが目的のある旅。

戦がその先に待つていようと 突き進む。

お互いがお互いを支えて。

当てはなく 目的のある 二人の旅は 続く。

終幕・旅立（後書き）

長々とお読みください、誠にありがとうございました。
まだまだ未熟なので回を追いつけて、どんどん上達してこさせたいと
思います。

それでは本当にありがとうございました^ ^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4469a/>

古の血

2010年10月8日15時34分発行